

第6回長時間研究会 2010年12月（福岡市）

『シンポジウム 長時間透析のエビデンス』

「長時間透析における糖尿病性腎症患者の生存率」

医療法人幸善会 前田病院 前田利朗

当院では1989年8月に透析療法を開始して以来、21年にわたり全患者に6時間透析を実施してきた。今回、糖尿病性腎症を原疾患とする当院の透析患者について、その生存率と死亡原因などについて調査検討したので報告する。

1. 対象と方法

1) 2010年7月末日現在における累積生存率調査

6時間透析における累積生存率であることを明確にするために、①当院で透析導入後、そのまま6時間透析を6ヶ月以上継続しているもの ②他施設での導入後、6ヶ月以内に当院へ転院し、以後、6時間透析を6ヶ月以上継続しているもの、という条件を満たした208人（男125人、女83人）を調査対象とした。このうち、糖尿病性腎症患者は67人（男41人、女26人）であった。累積生存率の算出はKaplan-Meier法を用いた。

2) 死亡原因の分類調査

死亡原因については臨床診断によるものであり、その分類は日本透析医学会の統計調査の項目に準じた。剖検は実施していない。

2. 結果

1) 6時間透析における糖尿病性腎症患者の累積生存率は5年81.1%、10年45.9%、15年24.5%で、非糖尿病患者のそれぞれ83.5%、59.7%、47.4%と比較するとやや低かった。一方、日本透析医学会調査（2008年12月31日現在）による糖尿病性腎症の生存率は、5年53.6%、10年26.2%、15年11.7%であり、長時間透析を施行している当院患者の生存率の方が明らかに優れていた。

2) 対象となった糖尿病性腎症の透析患者67人のうち、26人が観察期間中に死亡した。死亡原因は、感染症が7例26.9%で最も多く、悪性腫瘍と心筋梗塞がそれぞれ5例19.2%で続いた。心不全による死亡は1例3.8%のみであった。死亡時年齢は糖尿病群の69.5歳に対し、非糖尿病群は72.8歳であった。

3. 考察

当院が実施してきた6時間透析においても、糖尿病患者の累積生存率は非糖尿病患者に比べると10年目以降で低くなる傾向があり、とくに15年生存率の低下が目立った。糖尿病患者にとっては、この15年生存がひとつの大きな限界ラインかも知れないと考えられた。当院成績と日本透析医学会による全国調査との比較では、長時間透析を施行している当院の成績の方が明らかに優れており、至適透析の指標として患者生存率を見た場合、透析時間は長い方が良いと考えられた。